

特集にあたって

伊倉 義郎 (株)サイテック・ジャパン)

OR学会の研究普及委員会の企画する定例イベントの一つに「企業事例交流会」がある。これは年2回催される研究発表会と通常同時に行われ、様々な企業が日々の活動の中で直接OR手法を使った事例とか、ORに関係のありそうなプロジェクトについての発表を行い、その分野の研究者や実務家との議論を深めていただくという趣旨の企画である。発表企業にとっては解法のアイデアやアドバイスが受けられるし、研究者にとっては実務例の紹介を受けながら、コンサルや共同研究の可能性を探ることができる。

毎回2時間程度であるが、3~4件の発表で時間的な制約があり、とても十分に内容を紹介しきれない場合が多い。また紹介される実務例は、背景としてある数理問題がほとんどの場合理論的には解明できないほど複雑な場合が多く、研究トピックの宝庫とも思える。とはいえ、企業側としてはそれなりの工夫をして答えを見だし実務に生かしているというケースが多い。

米国 INFORMSにも同じようなプログラムがいくつかあるが、その一つが「Isolated Practitioners' Session」というもので、通常秋の研究発表会で夕方に行われる。ここでは、ORアナリストという自覚はなくても企業内で活躍しているOR実務家が孤軍奮闘している事例を紹介することが多い。また、フォーマルな研究発表形式というよりは、もっとリラックスした雰囲気の中で自由な議論をするという趣旨でワインとチーズが出る、というのも集客力の一つの理由となっている。

日本の企業事例交流会も、「ワインとチーズ」は実現できていないが、もっとリラックスした雰囲気の中で自由な議論をするというのが理想ではないだろうか。その意味で最近では、定番のOR事例にこだわらず、やや広め的话题を提供していただける企業にもご参加いただいている。一方では、なかなか講演企業を見つ

けるのが難しい場合も多く、できるだけ幅広く参加希望の企業を募集している。

さて今回の特集は2007年9月に行われた第20回と2008年9月の第22回の発表の中から5件のケースについて、講演者にご執筆を御願ひした。

天野氏ら(鹿島建設)による論文は、全国の橋梁システムの維持管理費用の最適化を提案するものである。最近話題になっている橋の老朽化に対するシステム的アプローチを実現するもので、急務でもある。

白田氏ら(竹中工務店)による論文は、地震等による大規模災害時の緊急対策として、企業のサプライチェーンをどう管理するかというシステムを紹介する。建築耐震性に関するノウハウとサプライチェーン最適化というOR的アプローチを融合した優れたものである。

佐中氏(三菱化学)による論文は、化学プラント・スケジューリングシステムを制約論理によって開発した例を紹介する。長年の種々の開発アプローチの末に到達した実務システムの姿で、大変参考になる。

松本氏(雪印乳業)の論文は、短期、中期、長期用の新しいSCMシステムを構築し、需給調整、販売計画、輸送計画に生かしている事例である。文章には表れてないが、このプロジェクトの背景にあるのは会社存亡の危機に際しての再生への固い決意であり、ORが会社の危機を救った貴重な例といえよう。

篠崎氏ら(東京ガス)の論文は、家庭用の省エネガス機器のマーケティング戦略についての分析例を紹介する。温室効果ガス削減という公共的な使命と企業の商品戦略の観点から、コンジョイント分析を用いた最適な戦略を論じていて大変興味深い。

以上のように、企業事例では幅広い実務例から様々な工夫を凝らしたOR事例が紹介されるのは大変有難い。このような事例を読むたびに人々のイメージションと想像力の豊かさには驚かされるばかりである。